

小・中学校

平成 5 年 度

教育研究員研究報告書

へき地教育

東京都教育委員会

平成 5 年度

教育研究員名簿

市 町 村 名	学 校 名	氏 名
八 王 子	加 住 小 学 校	小 川 トキ子
青 梅	友 田 小 学 校	高 木 一
青 梅	第 2 中 学 校	曾 我 有 二
日 の 出	本 宿 小 学 校	佐 藤 薫
日 の 出	平 井 中 学 校	須 藤 和 博
五 日 市	増 戸 小 学 校	△ 黒 沢 啓 治
檜 原	檜 原 小 数 馬 分 校	◎ 本 村 誠
檜 原	檜 原 中 学 校	○ 高 橋 久 乃
奥 多 摩	小 河 内 小 学 校	実 森 浩 明

◎ 全体世話人
○ 副世話人
△ 全体記録係

担 当

東京都多摩教育事務所西多摩支所 指導主事 土 居 重 一

〃 石 倉 敏 雄

目 次

I	研究主題及び主題設定の理由	2
II	主題に迫るための基本的な考え方	3
1	研究のねらい	3
2	研究推進の視点	4
III	研究の全体構想	5
IV	研究の内容	6
実践事例・その1	調べ学習や話し合い活動を通して、表現力を伸ばす指導法の工夫 ・小学校第5学年社会科「わたしたちの生活と工業生産」	6
実践事例・その2	継続的な観察・調査活動を通して、表現力を伸ばす指導法の工夫 ・小学校第6学年理科「人とかんきょう」	9
実践事例・その3	身近な自然を観察し、全校児童が発表する活動を通して、表現力を伸ばす指導法の工夫 ・小学校全学年道徳及び特別活動「自然愛」	12
実践事例・その4	課題の調査や発表活動を通して、表現力を伸ばす指導法の工夫 ・中学校第1学年社会科「さまざまな地域」	15
実践事例・その5	地域教材を活用した体験的学習を通して、考える力・表現力を伸ばす指導法の工夫 ・中学校第2学年理科「動物の世界」	18
実践事例・その6	身近な素材を活用した体験学習を通して、表現力を伸ばす指導法の工夫 ・中学校第2学年家庭科「食物」	21
V	研究のまとめと今後の課題	24

研究主題 体験的な活動を生かし、一人一人の豊かな自己表現力を伸ばす指導法の工夫

I 主題設定の理由

本研究部会では、地域の特性、児童・生徒の実態について共通理解を図った上で、へき地教育の課題を解決するために指導法について研究を進めてきた。

1 地域の特性と児童・生徒の実態

多摩地区のへき地は地域的に見ると東京の西部に位置し、一部では住宅の開発などが押し進められている地域もあるが、多くの児童・生徒たちは自然に恵まれた環境の中で育っている。

親の代からその地域に住んでいる人も多く、地域と学校との関係は密接であり協力的でもある。また、豊かな自然環境とともに、一部の地域には伝統的な文化も多く残っているが、それらを有効に活用して遊ぶなどの経験は少ない。都市部へ出かけるのに時間がかかるためか生活空間も限られ、多くの人々と接触する機会が少ないという状況にある。しかし、マスメディアの発達などにとまなう情報だけは、豊富に入っている。

このような環境の中で育っている児童・生徒は、明るく素直で純朴である。与えられた課題には、真面目に取り組むことができるが、新しい問題が起こると他人からの指示を期待してしまうなど自主性に欠ける面も見られる。また、自分の意志を適切に伝える事ができないなどの表現力の乏しさがある。

2 豊かな表現力をつけさせるために

表現力の乏しさの理由としていくつかの点が考えられる。一つ目には、幼い頃から同一の小集団で生活しているため、児童・生徒の関係がより親密になっていて会話をういなくとも意志の疎通が図られていること。二つ目に、集落が離れていて近所の友人と遊ぶ事も難しかったり、塾やTVゲームの広まりなどで集団で遊んだりする機会が少ないなどの背景があること。三つ目に、人と接することが少なく表現し合う活動の機会や場の不足にも起因するのではないかと考えた。

表現とは、自分の思っていること、また感じていることを何らかの方法で伝えること、表すことである。その方法には、様々なもの（言葉・文字・絵画・身体・音など）があり、年齢や発達段階によって異なるものである。そこで、身近なものから教材を工夫することや発達段階に応じた表現など指導法の工夫に重点を置いて取り組むこととした。特に自分の感覚で感じることでできる授業を基本に考え、その感動体験から体得したものを発表できる機会や場を設定し、認めていくことで自信を持たせる工夫をした。このことが自己表現力を伸ばす原動力となり、主体的な学習に発展し、児童・生徒の豊かな表現力が向上し、さらに豊かな人間性・社会性の育成につながっていくものと考えて標記の研究主題を設定した。

Ⅱ 主題に迫るための基本的な考え方

1 研究のねらい

(1) 自分の考えや思いをよりよい方法で表現する態度や能力を育てる。

児童・生徒が急激に変化していく社会をたくましく生きていくためには、自己表現力を養うことが極めて重要である。

表現力は一人一人の個性を発揮していくために必要な能力であるためばかりでなく、他人によって表現されたことを理解する力にも大きくかかわっている。したがって、他人とかわり合いながら生きていくなかで、表現力は必要な能力の一つと考えられる。

自己表現力を育てるには、児童・生徒一人一人が体験的な活動からいろいろなことを感じ取ることのできる資質を伸ばし、自分の考えや思いをよりよい方法で表現する態度を養うことが重要である。そうすることで、自信を持って進んで表現するようになるであろうと思われる。

このことは、表現力が乏しいと指摘されてきたへき地校に学ぶ児童・生徒にとって重要な課題である。そこで、児童・生徒が意欲をもって表現できるようにするために、本研究のねらいを「自分の考えや思いをよりよい方法で表現する態度や能力を育てる」と設定し、研究を進めてきた。

(2) 研究の仮説

児童・生徒が自己を豊かに表現し主体的に学んでいくためには、まず、興味や関心を持たせる教材を選択・工夫し、体験的な学習活動を取り入れることが重要である。そのことは、児童・生徒の学習意欲や学習課題の明確化と密接なかかわりを持ち、表現しようとする態度の育成へ発展すると考えられるからである。

また、児童・生徒が主体的に課題を解決したり、成就感の得られる機会や場を設定したりすることも重要である。課題解決を目指す学習の過程において、一人一人が学んだことや仲間とのかかわりの中で集団や社会を意識した見方・考え方を発表し合うことにより、表現力の向上や相手の意見を尊重する態度の育成が図られるのではないかと考えた。

以上のような考えから、次のような仮説を設定した。

〈仮説1〉 地域素材や身近な素材を活用し、体験的な学習活動を展開することにより、児童・生徒の興味・関心が増し表現しようとする意欲も高まるであろう。

〈仮説2〉 多様な考えを生かしながら主体的な学習活動を工夫し、発表の機会や場を設定することにより、お互いの良さを認め合えるであろうし、よりよい表現を工夫するであろう。

2 研究推進の視点

(1) 地域素材や身近な素材を活用した教材の工夫

西部山間地域においては、恵まれた自然のもと、体験的な活動を組み込むことの可能な地域素材や身近な素材が豊富にある。身近にある事物・事象を活用することにより、児童・生徒の興味・関心が増し、主体的な活動と表現意欲を促せると考えた。

具体的には、次のような点に配慮するように努めた。

- 発達段階に即し、興味・関心の持てる教材を工夫する。
- 個に応じた多様な学習課題が可能な教材を工夫する。
- 既存の知識や経験が生かせるような教材を工夫する。
- 思考・判断・創造を促す教材を工夫する。
- 具体物や視聴覚教材等適切な資料を準備し、有効な活用を図る。

(2) 児童・生徒の主体的な学習活動の展開

へき地校に学ぶ児童・生徒は、素直ではあるが指示されて行動するというような、受け身的、依存的傾向が見られる。したがって、一人一人が主体的に学習に取り組めるようにするため、課題解決の学習や体験的活動が重要であると考えた。特に、次の点に配慮するようにした。

- 体験的活動の機会や場を確保するため、学習内容を精選・重点化する。
- 学習課題明確化の過程を重視し、一人一人が目標と追究の見通しを持てるようにする。
- 追究過程の中に自力解決の場や集団解決の場を設定する。
- 自分で工夫した方法で学習成果をまとめたり作品化したりする活動ができるようにする。

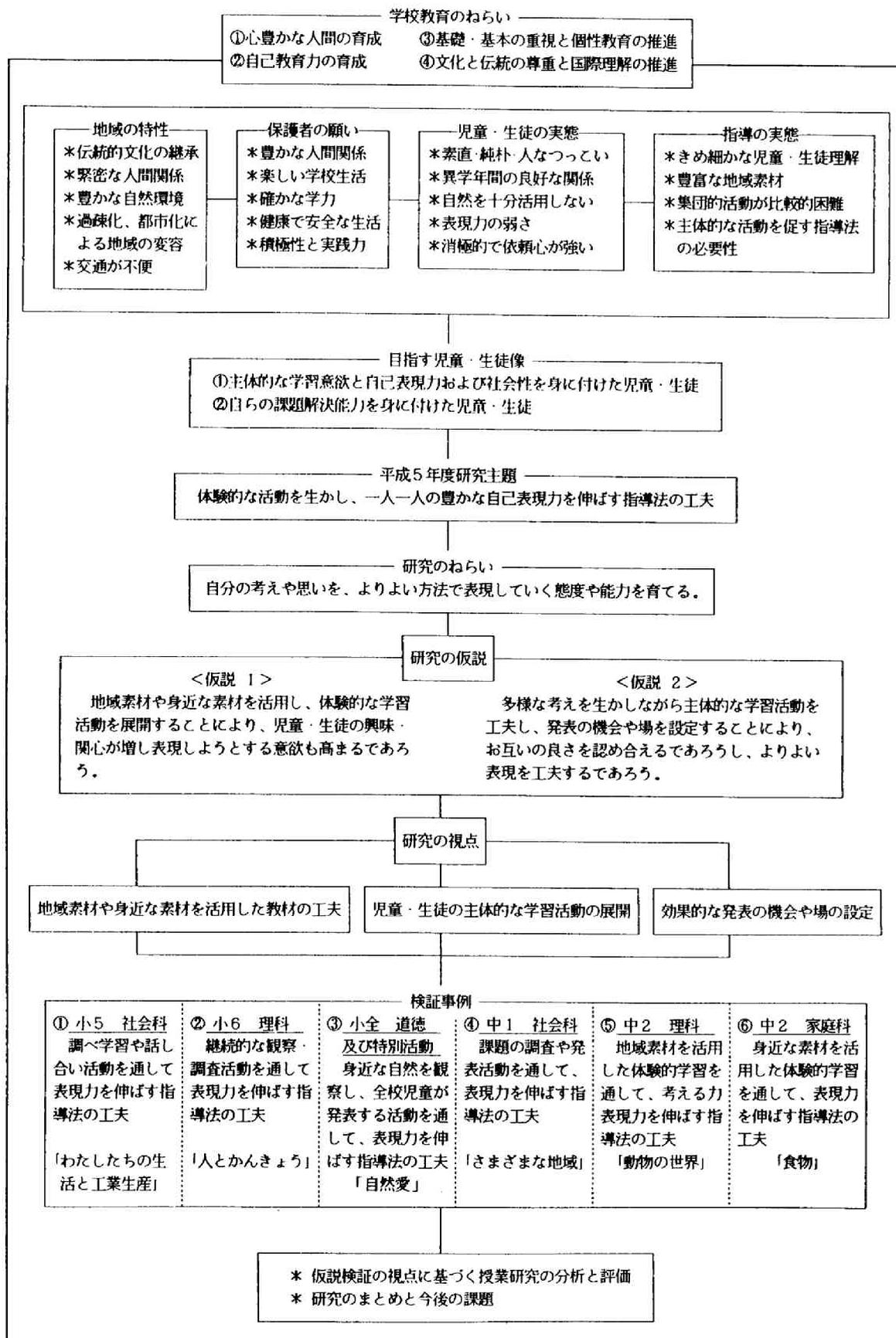
(3) 効果的な発表の機会や場の設定

へき地校に学ぶ児童・生徒は、相手との会話をういなくとも相互に意思の疎通が図られることがあり、そのことが自己表現力の不足がちな背景にもなっている。そこで、発表や話し合いの機会や場を多く設け、一人一人が自分の思いや考えを伝えることができるようにし、表現力が高められるようにすることが必要であると考え、主に次のような点に配慮することとした。

- 相手に伝えるための効果的な表現方法を内容に応じて選択・工夫できるようにする。
- 学習形態を工夫し、相互に学び合える場を設定する。
- 自己評価の機会の設定とともに、相手のよさを認め合える相互評価の機会も設定する。
- つぶやきや表情、しぐさも大事にする。また、発表や表現は、その児童・生徒が自信を持てるように助言、励まし、賞賛をしていく。

以上のような基本的な考え方に基づいて研究主題に迫ることとした。

III 研究の全体構想



IV 研究の内容

実践事例・その1

調べ学習や話し合い活動を通して、表現力を伸ばす指導法の工夫

小学校 第5学年 社会科

1 単元名 「わたしたちの生活と工業生産」

小単元名 「工業生産と公害」

2 小単元の目標

- (1) 工業生産がもたらす様々な影響について考えることによって、公害について調べようとする意欲を持つことができる。
- (2) 自分たちの身の回りにある公害や環境の様子にも目を向け、工業生産と国民生活のよりよい発展を考えることができる。
- (3) 公害の原因や被害の様子、被害者が受けた苦しみ、現在までの経過などを資料からとらえ、公害に対する自分の考えを発表することができる。
- (4) 公害問題の解決までの努力を知り、各種公害から国民の健康や生活環境を守ることが大切であることを理解することができる。

3 小単元設定の理由

現在、環境問題は各国で取り組まなければならない重要な課題になってきている。これからの社会を生きていく児童にとって、各種公害から国民の健康と生活環境を守ることの大切さを理解し国民生活のよりよい発展を考えることは必要なことであると考えられる。

公害という言葉は、この地域の豊かな自然環境や日常の生活から考えると、児童には馴染みが薄い。そこで、自ら課題を見つけ、調べ、解決する主体的な学習を展開することにより、公害に対する理解が深まり、よりよい国民生活への願いや自分なりの考え、意見を持つことができるようになって考えて小単元を設定した。

4 研究主題との関連

公害を文献や視聴覚教材から調べる活動を「体験的活動」と考えた。また、調べた結果の発表や理解を深めるための話し合い、グループによるビデオ番組製作のための話し合いやその作品を「表現活動」と考えた。

ビデオ番組製作を取り入れたのは、映像を使った表現もあることを知らせたかったことと映像を受け入れる側から送り出す側になることによって、自分の考えや思いをより意欲的に表そうとするのではないかと考えたからである。

5 地域の様子と児童の実態

本校の学区は秋留台地の西に位置し、町民農園や苗畑などが広がっている。また、南と北には丘陵地帯が望め、平井川が流れ、自然が豊かに残っている。

児童の多くは西の山の斜面にある団地から通っている。団地の裏山や平井川などで遊ぶこともあるが、近くの児童公園で遊ぶことが多い。また、スポーツや英語などの習い事に通う児童も多い。児童の性格は穏やかで素直である。しかし、自分の言いたいことをはっきり最後まで言うことや、他の児童の言うことに耳を傾けることが不得手な児童が目立ってきつつある。また、本学級について言えば、発表することや意見を言うことは自分にはできないのだと思い込んでいる児童がおり、発言に自信を持たない実態がみられる。

6 指導計画（10時間）

- (1) 便利な生活と公害（調べる項目を決めよう）…… 1時間（一斉）
- (2) さまざまな公害（調べよう）
 - 水俣病と四日市ぜんそくについて調べよう…… 3時間（個人）
 - 調べたことを発表しよう…… 1時間（一斉）本時
 - その他の公害も調べよう…… 1時間（グループ）
- (3) 公害を学習して（ビデオ番組にしよう）…… 3時間（グループ）
- (4) ビデオ番組を見合おう…… 1時間（一斉）

7 本時の指導

- (1) 本時の目標
 - ① 水俣病と四日市ぜんそく問題の解決までの経過や、被害者やその家族の苦労を理解し公害をなくす努力が大切であることに気付くことができる。
 - ② 資料から読み取ったことや、それをもとにしてまとめた自分の考えたことや思ったことを発表することができる。
 - ③ 友人の発表を聞き公害についての理解や自分の考えや思いを深める態度を養うことができる。

(2) 本時の展開

	学 習 活 動 と 内 容	教 師 の 支 援	資 料 ・ そ の 他
導 10 入 分	・水俣病や四日市ぜんそくについて調べたことを発表する。	・発言が不得手な児童を支援する	各自のプリント、資料集、教科書
展 開 20 分	・2つの公害病を調べて分かったことや思ったことをプリントにまとめ発表し合い、理解を深める。 ア. 排水や煤煙の処理の大切さ イ. 被害者やその家族の苦勞 ウ. 解決までの努力 エ. 費やされた時間	・まとめることや書くことが不得手な児童に助言する。 ・発表を聞いたら、必ず番号札を使って意思表示をさせる。 ・発表時には必要な資料を示させる。	各自のプリント 番号札 ①意見 ②質問 ③賛成 ④反対 ⑤付け足し
ま 15 と め 分	・これからの便利な生活と健康な生活をどのようにして守っていけばよいのか考えて話し合う。	・考える視点を与える。 ア. 工場や住民の努力 イ. 国や自治体の努力	番号札

(3) 評価

- ① 水俣病と四日市ぜんそく問題の解決までの経過や、被害者やその家族の苦勞を理解し、公害をなくす努力が大切であることに気付くことができたか。(知識・理解)
- ② 資料から読み取ったことや、それをもとにしてまとめた自分の思ったことや考えたことを意欲的に発表することができたか。(思考・判断・意欲・表現)
- ③ 友人の発表を聞き、公害についての理解や自分の考えや思いを深める態度を養うことができたか。(関心・態度・技能)

(4) 授業の考察

- ① 自分で調べたことが自信になり積極的に発表しようとする意欲が見られた。
- ② 資料を指摘しながら発表させたことが発表の内容の質を高めていた。
- ③ 資料を限定したため個性豊かな発表があまりできなかった。
- ④ 一人一人の実態に応じた個別指導などの工夫が必要であった。
- ⑤ うまく調べられなかった児童にも発表の機会があると良かった。

8 今後の課題

- (1) 調べ学習の時には、資料を選択する時点から自分で考え、自由に調べることによって個性豊かな発表への意欲が増すような工夫が必要である。
- (2) 発表が不得手な児童でも意思表示ができる方法を番号札以外にも工夫し、さらに、励ましや助言を与えることにより自己表現力を伸ばす自信をつけさせる必要がある。
- (3) すべての児童に自分の考えや思いを発表できる機会や場を均等に設定したい。

実践事例・その2

継続的な観察・調査活動を通して、表現力を伸ばす指導法の工夫

小学校 第6学年 理科

1 単元名 「人と環境」

2 単元の目標

人と他の動物・植物及び周囲の環境とのかかわりを相互に関係づけながら調べ、見いだした問題を意欲的に追究していく活動を通して、生命を尊重する態度を育てるとともに、生物と環境とのかかわりについての見方や考え方を養う。

3 単元設定の理由

本校は多摩川に近く、四季の変化も美しく、自然環境に恵まれた地域にある。

そこで、本単元を学習していく上で児童が主体的に活動できる場として、身近な多摩川を取り上げ教材化することにした。これは、生命の連続性や人間と環境を学習する場として、川（水）が人間や生物にとって生命を存続させるために重要な役割を果たしていることから適切な教材と考えたのである。さらに、身近な多摩川に直接働きかけることにより、児童の興味・関心が増し、課題解決能力も高まり、科学的な見方や考え方が育成でき、調べたことやまとめたことを意欲的に発表できるであろうと考え単元を設定した。

4 研究主題との関連

児童が多摩川に継続的に出かけて行き、自らの感覚機能を働かせて川の様子を観察したり、水質などを調査したり、また、魚や水生昆虫を捕まえて種類を調べ責任を持って飼育観察していくことを「体験的活動」と考えた。このような活動の中から得た結果をもとに、主体的に考え、様々な方法で相手に伝え、課題を解決していくことが、お互いを認め合う気持ちを育て、人間関係を深め、自己表現力を伸ばすことにつながると思ったのである。

5 地域の様子と児童の実態

本校は青梅市の中でも一番南に位置し、多摩川を渡ると羽村市、長淵丘陵を越すと日の出町という地域にある。17年前に開校し現在は全学年2学級、児童数400名の学校である。

地域の特徴としては、古くからこの地域に住んでいる人達が多く、お年寄りと同居している児童もかなりいる。また、自然が豊かで多摩川や丘陵が近くにあるため水と緑に恵まれていて、四季を通して川や山で遊んだり学習したりすることができる。

このような環境の中で、児童は、明るく伸び伸びと生活することができ、誰とでも親しくなることができるのだが、人に対して自分の考えや気持ちを伝えるということが不得意であ

る。特に単語を並べただけの会話になってしまい、相手に自分の気持ちが伝えられなかったり、相手が聞き返さない最後まではっきりと言えなかったりする児童が多い。

6 指導計画 (10時間)

- (1) 多摩川の上流と下流を比べてみよう…………… 1時間
- (2) 生活排水のまじった水の性質などを調べてみよう…………… 1時間 (本時)
- (3) 多摩川の上流の生物と下流の生物は同じだろうか…………… 1時間
- (4) 動植物が生きていくうえで水以外に何が必要だろうか…………… 1時間
- (5) 地球上で人間が生き続けられるのはなぜだろうか…………… 1時間
- (6) 自分たちの身近な環境について調べてみよう…………… 3時間
- (7) 人と環境についてまとめてみよう…………… 1時間
- (8) 自分たちが地球の環境を守っていけることで、
できることはないだろうか…………… 1時間

7 本時の指導

(1) 本時の目標

- ① 多摩川の水や生活排水に関心を持つことができる。
- ② 水の性質などを進んで調べ記録し発表することができる。
- ③ 自分たちの生活が川の水と深くかかわっていることに気付くことができる。

(2) 本時の展開

	主 な 学 習 活 動	教 師 の 支 援	資 料 ・ そ の 他
導 入 5 分	・前時の学習を振り返り、本時の流れを確認する。	・前時で確かめた事を確認し、本時で活動する内容を話す。	・多摩川の水と生活排水を用意する。 ・ビーカー
展 開	◎自分たちで持ってきた生活排水を多摩川の水とまぜるとにおいや色などはどのように変わるだろうか。 ・班でどんな生活排水を持ってきたのか発表する。 ・生活排水をまぜて観察する。 ・記録用紙に記入する	・できるだけ具体的に表現させる。 ・においをかぐときに直接かがないように注意する。	・個人用記録用紙 ・記録一覧表
25 分	◎生活排水がまじった川の水は多摩川の水と性質が違うのだろうか。 ・パックテストを行って水の性質を調べる。 ・記録用紙に記入する。 ・記録一覧表に記入する。	・パックテストのやり方を確認させる。	・パックテスト

ま と め 15 分	<p>◎多摩川の水を汚くしている原因は何だろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調べた結果をもとに班で話し合い発表する。 ・水を汚くしている原因をまとめ発表する。 ・生活排水の処理の方法を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・汚染源は生活排水だけではないことをおさえる。 ・生活排水を直接川へ流さないようにすることをおさえる。 ・次時の学習内容を連絡する。
------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(3) 評価

- ① 川の水や生活排水に関心を持つことができたか。(自然現象への関心・意欲・態度)
- ② 水の性質などを進んで記録し、意欲を持って発表することができたか。
(観察・実験の思考・判断・表現)
- ③ 自分たちの生活が川の水と深くかかわっていることに気付くことができたか。
(自然事象についての知識・理解)

(4) 授業の考察

- ① パックテストは視覚により水の性質などが分かるため効果があり、児童は意欲的に観察・実験を行った。
- ② 個人で調べた結果を記録一覧表に書き入れることにより、児童に発表の機会と場とを均等に与えることができた。
- ③ 個人での観察・実験をした後にグループで話し合い活動を行わせる場合は、個人で調べた内容や結果を自分なりに整理させておく必要がある。

8 今後の課題

- ① 調査・観察した内容をまとめるのに言葉だけではなく、絵や図・表なども用いてより効果的に表現できるように指導していく必要がある。
- ② 豊かな自己表現力を伸ばすために、励ましや助言を与え、自信をつけさせる必要がある。
- ③ 本単元の学習にとどまらず、今後も児童が意欲を持って、調査・観察・実験ができるような体験的な活動を取り入れた教材の開発が必要である。

実践事例・その3

身近な自然を観察し、全校児童が発表する活動を通して、
表現力を伸ばす指導法の工夫

小学校 全学年 道徳及び特別活動

1 主題名 自然愛（愛鳥活動）

2 主題の目標

(1) 第1・2学年

身近な自然の中での活動，中でも野鳥を中心とする観察活動を通して，自然や動植物に対するやさしい心を養う。

(2) 第3・4学年

身近な自然の中での活動，中でも野鳥を中心とする観察活動を通して，地域の自然環境のすばらしさを感じ取り，動植物を大切にしようとする心を育てる。

(3) 第5・6学年

身近な自然の中での活動，中でも野鳥を中心とする観察活動を通して，地域の自然環境を大切に，護り伝えていこうとする心情と実践的な態度を養う。

3 主題設定の理由

本校は四方を山に囲まれ，眼下に奥多摩湖を見下ろす自然環境に恵まれた場所にある。しかし，子供たちにとっては日常的な環境であり，それに興味や関心を持つことはあまり多くはない。本主題を通して，児童が自発的に自然に目を向け，自然の持つすばらしさや不思議さ，偉大さ，また厳しさ恐ろしさなどに気付き，自分の生活する地域を再認識してほしいと考えた。これらの気付きや心情は体験的な活動によって高められ，その高まりが児童の表現意欲を促すことになると考え，本主題を設定した。

4 研究主題との関連

身近な自然の中に入り，意識的に動植物や自然を観察することを体験的活動と位置付けた。この活動を通して児童が今まで気付かなかったことに気付き，自然の持つすばらしさや不思議さ，偉大さなどを感じとることを目指した。また，これらの体験的活動を通して得られた知識や思い，意欲などは素材の身近さからも表現意欲を高めるために効果的であると考えた。

5 地域の様子と児童の実態

自分たちが生活している場所は，学区全域が秩父多摩国立公園の中に位置しており，「自然が豊かである」という意識はある。また，雪が降ると登校が困難になったり，近年，大規

模な土砂崩れがあったりと自然の厳しさも経験している。しかし、自然のすばらしさや不思議さ、偉大さなどを感じとる機会はあまりないようである。そのためか、地域の自然に積極的に目を向け、それを大切にし、護っていこうという実践的な態度はまだ十分とはいえない。

6 指導計画（野鳥の観察を通して自然愛を培う道德教育及び特別活動）

- (1) 身近な野鳥を描くことにより、野鳥の美しさに気付く。…… 1時間（5月18日）
- (2) イワツバメの観察を通して、生命の尊さを知るとともに、
自然に生きる野鳥の厳しさを感じ取る。…… 1時間（6月21日）
- (3) 観察会を通して、身近な自然の美しさや不思議さ、今まで気付
かなかったことなどを感じ取る。…… 1時間（10月5日）本時
- (4) 餌台の観察を通して、餌の与え方を考え、人間と自然の
よりよい関係について考える。…… 1時間（12月6日）
- (5) 観察会を通して、厳しい冬の自然環境の中で生きる野鳥
の様子を知る。…… 1時間（1月日）
- (6) 一年間の経験をもとに、自然の様々な表情や変化を知り、
自然の豊かさを実感するとともに実践的な態度を育成する。… 1時間（3月1日）

7 本時の学習

- (1) 本時の目標
 - ① 第1・2学年
 - ・自然の美しさを感じ取り、身近な野鳥や植物に接して自然と親しむ。
 - ② 第3・4学年
 - ・自然の美しさや不思議さなどに気付くとともに、身近な自然に感動する心情を育てる。
 - ③ 5・6年生
 - ・自然の美しさや不思議さなどを感じ取るとともに、人間の自然に接する態度や心情にも目を向けていこうとする心情を培う。
 - ④ 全学年を通して
 - ・友達と互いに協力して観察活動ができるようにする。
 - ・観察活動を通して、様々な発見を意欲的に発表し合うことができるようにする。

(2) 本時の展開

	学 習 活 動 と 内 容	教 師 の 支 援	資 料 ・ そ の 他
導 3 入 分	・紅葉前後の桜の葉から季節の変化や色彩の美しさ、不思議さに気付く。	・身の回りの自然に目を向けるようにする。	・紅葉前後の桜の葉
展 20 開 ①分	・学校周辺の観察活動を通して、自然の中での気付きや思いを各自の発見カードに記入する。 ・友だちと協力しながら観察する。	・自然の美しさや不思議さにも着目するように助言する。	・発見カード ・双眼鏡 ・地上望遠鏡
展 19 開 ②分	・発見カードをもとにしながら児童全員が気付いたことや発見したことについて発表し合い、話し合う。	・全員の発表を取り上げることで、様々な発見があったことに気付くようにする。	・短冊カード (発表を提示するため)
ま 3 と め 分	・発表された事をもとに、季節の移り変わりや豊かな自然を感じとる。	・現在紅葉している場所を示すなどして、継続的な活動に結び付ける。	

(3) 評価

① 第1・2学年

- ・意欲的に観察活動を行い、自然に関することに着目できたか。

② 第3・4学年

- ・紅葉による葉の色の变化などに着目し、自然の美しさなどを感じ取ることができたか。

③ 5・6年生

- ・自然の美しさや不思議さなどを感じ取り、季節の変化を知る場所を探したりするなどして、継続的に自然を見つめていこうとすることができたか。

④ 全学年を通して

- ・友達と協力しながら観察活動をしたり、発表をし合ったりできたか。
- ・自分の発見を意欲的に発表することができたか。

(4) 授業の考察

- ① 道徳教育の観点から、観察と発表だけでなく道徳的価値付けを明確にすることが必要。
- ② 自然に対する関心・意欲の高まりが見られ、日記などにも自然のことが増えた。
- ③ 発表では、児童が安心して発言し合うことのできる雰囲気があり、成就感もあった。

8 今後の課題

- (1) 「愛鳥活動」を道徳教育として位置付けて行う場合、他の教科との関連性を持たせるとともに、道徳的な価値付けを一層明確にし、年間で6時間扱いの内容を再構成する必要がある。
- (2) 発見カードの記入や発表の方法等、学年に応じた発展的な指導が必要である。

実践事例・その4

課題の調査や発表活動を通して、表現力を伸ばす指導法の工夫

中学校 第1学年 社会科

1 単元名 「さまざまな地域」

小単元 「EC諸国」

2 小単元の目標

- (1) ヨーロッパと日本を比較し、その違いや特色を理解する。
- (2) 西ヨーロッパ諸国が、それぞれ異なった伝統と文化を生かしながら、ECの名のもとに大きく一つにまとまろうとしていることを、その歴史・現在の情勢・問題点などに分けて考察する。

3 小単元設定の理由

わが国とEC諸国との交流は、経済の発展とともにますます盛んになり、今後一層の緊密化が望まれる。そこで、EC諸国と日本を比較しながら、EC域内で営まれる人々の生活について、理解を深めることをねらいとしてこの小単元を設定した。なお、このねらいを効果的に達成するために、課題解決学習を取り入れた。そして、学習の結果を班ごとに発表させる機会を設け表現力を育成し、生徒が自ら学び、意欲的に学習に取り組めるように配慮した。

4 研究主題との関連

ECについての学習課題解決のための調査活動・発表に向けて資料づくり・原稿づくり・発表・発表に対する評価・質疑応答という一連の学習活動を「体験的活動」と位置付けた。

生徒が、課題解決のために調査し理解したことを、どのような発表方法で分かりやすく他の生徒に伝えたらよいかについて考え工夫することは、生徒自身の自己表現力を伸ばし養う指導につながるものと考えた。

具体的指導の場面では、生徒38名を六つの班に分け、班員の一人一人に班内での役割分担をさせ、発表に至るまで生徒一人一人に「自分も班員としての役割を果たせた」という喜びを感じさせたいと考えた。さらに、自分の考えを主張し、相手の意見や考えを受け入れるという態度も養うことができると考えた。

5 地域の様子と生徒の実態

(1) 地域の実態

本校学区は、多摩川や長淵丘陵などの自然に恵まれている。一方、都心に一時間半程度で行ける交通の便利さにより、近年マンションの建築が増え、学区内の人口も年々増えて

きており、自然に恵まれた学区にも徐々に都市化の波が押し寄せつつある。

(2) 生徒の実態

都市化の波が押し寄せつつあるが、生徒は明るく素朴で人なつっこい性格である。しかし、人前で自分の意見や考えを発表したり主張したりすることを苦手とする生徒が多い。従って、授業においても質問や発言が少なく、発言させても声が小さかったり、語尾がはっきりしなかったりすることが多い。また、自分の考えを上手に分かりやすく表現できる生徒が極めて少ない。

このような本校生徒の実態を見ると、一人一人の生徒の豊かな自己表現力をいかに伸ばしていくかが、課題である。

6 指導計画（7時間）

- (1) EC諸国（国のわくをこえて結びつく国々）…………… 1時間（一斉）
- (2) ヨーロッパの生活・民族・文化について…………… 1時間（一斉）
- (3) 課題選択・調査・発表準備…………… 3時間（班学習）
- (4) 発表会を通して、ECについての理解を深める…………… 1時間（本時・発表会）
- (5) 国境をこえて行き来する観光客…………… 1時間（一斉）

7 本時の指導

(1) 本時の目標

- ① ヨーロッパの国々の中で、EC加盟国の役割や産業について理解する。
- ② EC域内で国境を越えて、人・物・金などが自由に行きかう姿を通して、その利点や問題点を理解する。
- ③ 聞き手に分かりやすいように資料を整え、工夫して発表させると同時に、発表内容を理解しようとする態度を養う。

(2) 本時の展開

	学 習 活 動 と 内 容	教 師 の 支 援	資 料 ・ そ の 他
導 5 入 分	・ EC加盟国12カ国を確認する。	・ 各自が着色したEC12カ国の地図で、発表するECの位置を再確認する。	・ 白地図 ・ ヨーロッパの掛地図
展 開	・ ECについての各班の課題について調べたことを発表する。 ・ 各班が用意したワークシートに発表内容をまとめる。 ・ 社会科係が司会をする。 ・ 記録をとる。	・ 発表方法は、各班の工夫を生かすようにする。 ・ 発表者や司会者が、本題からそれないように配慮する。 ・ 巡回して発表内容が理解できているか把握する。	・ 各班は、発表方法により、OHPや模造紙などを使用する。

ま と め 分	<ul style="list-style-type: none"> ・司会者を中心に，質疑応答をして，まとめる。 ・次回の予告 	<ul style="list-style-type: none"> ・いくつかの観点を設定して評価する。 ・生徒同士も評価する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・評価カード
------------------	------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------

(3) 評価

- ① 各班の調査課題が，分かりやすく発表できたか。(技能・表現・態度)
- ② 発表者の内容が理解でき，ECのしくみや産業などが理解できたか。
(関心・理解・判断)
- ③ 学習内容に主体的に参加することができたか。(意欲・関心・態度)

(4) 授業の考察

- ① 各班が，発表に工夫を凝らした。
 - ア 劇化(人形劇や紙芝居)の発表は，調査内容を理解した上で，脚本をつくり演ずるという，表現方法としては高度なものを用いる班もあった。
 - イ 分布図やグラフで，色の濃淡を使用した発表ができ，工夫がみられた。
 - ウ OHPを使用した班では，年ごとの変化を重ねていく方法をとっていた。
- ② 調査内容の発表にとどまらず，自分の意見・感想を発表でき，発表内容をより深められた。
- ③ 発表を聞く側は，2～3の質問と，地名を探す活動のみで，もっと多く活動する場を与えるべきであった。

8 今後の課題

- (1) 調査課題を設定する場合，幾つもの課題を用意して選択させたり，単元の共通点などから，互いに関連した課題を生徒に設定させ，より意欲的に調査・発表できるようにさせたい。
- (2) 発表を主眼にした授業であったが，表現力を高めるため，各班の発表後に感想を出し合ったり，改善意見を出させ，発表者だけでなく発表を聞く側の活動も，活発にさせたい。
- (3) 今回の調査・発表の経験を生かし，今後の授業でさらに豊かな自己表現力を伸ばしたい。

実践事例・その5

地域素材を活用した体験的学習を通して、考える力・表現力を伸ばす指導法の工夫 中学校 第2学年 理科

1 単元名 「動物の世界」

小単元「身近な野性動物と人の生活とのかかわり」

2 小単元の目標

- (1) タヌキの頭骨標本の作製・観察と、ビデオ教材の活用などから動物の多様な世界や体のしくみの面白さを感じさせ、動物の世界への関心を深める。
- (2) 観察・実験・聞き取りを通して、タヌキの頭骨の特徴や生活の方法について、科学的な見方、考え方をするように指導し、また、わかった事や調べた事を正確にわかりやすく伝えるための表現の工夫をする。
- (3) 日の出町（本校のある町）の過去の野性動物の様子を調べ、その生活のしかたを知る。そして人の生活とのかかわりについて自分の意見や考えをまとめ、表現できるようにする。

3 小単元設定の理由

西多摩地区では、ここ数年タヌキが車にはねられ死んでいるのをしばしば見かけるようになった。本小単元では、このタヌキを教材に使用して身近な所で生活している野性動物に関心を向けさせ、観察・実験などから体のしくみや生活の方法を学習するとともに、人の生活とのかかわりについて考え発表させる事を目標に設定した。これを発展させることにより、身近な自然環境を科学的にとらえ、自然保護の理解への糸口にしたいと考える。

4 研究主題との関連

本小単元の目標を達成するためには、自然を観察させる日頃からの指導と体験的学習が不可欠であると考え、以下の体験的活動を取り入れて課題の明確化と具体化をねらった。

- (1) タヌキ（他のホニュウ類でも可）の死体を見つけ頭骨標本作りと観察
- (2) 夏休みの宿題「日の出町…昔の野性動物」聞き取り調査
- (3) ビデオ教材の活用「生きもの地球紀行・雑木林はタヌキの楽園だった」（NHK）

表現活動では、体験的活動を通して気づいた事やわかった事を随時発表していき、最終的に野性動物と人の生活とのかかわりについて、自分の考えを文章でまとめ、発表する。この過程では、一人一人の意見を大切にしながら学習を進めていきたい。また、仲間の意見や考えを尊重したり、発表しあったりする機会を大事にするように指導したい。本小単元の終わりには、文章化した全員の考えを配布して、次の学習へ結びつけていく。

5 地域の様子と生徒の実態

丘陵に囲まれた日の出町平井地区は、平坦な土地に住宅が集まり、宅地開発が山の斜面にまで及んでいる。鉄道の通っていない町であるが、最近の10数年間に急激な人口の増加があり身の回りの自然は、豊富とはいえ大きく変わりつつある。近年、ゴミ処分場問題もあり住民の自然環境に対する関心は高い。

時々変わった動植物を職員室まで届けてくれる生徒がいるものの、自分を取り巻く自然に無関心な者は多い。方向を示すと大変熱心に取り組むが、指示がないと目の前に重要な事象が起きても気づかないという傾向がある。このことから、具体的に考えるヒントを提示し一人一人が課題を解決していく学習の必要性を感じる。自発的な発言は、上級生になるとほとんどないので表現方法には工夫が必要である。また本校は体験的学習に力を注いでいる学校なので、それを生かした活動を授業に取り入れる事は十分可能であると考えた。

6 指導計画（4時間）

- (1) 「日の出町…昔の野性動物」聞き取り調査……………夏休みの宿題
- (2) 小単元の説明、野性動物と人の生活とのかかわり（一回目）
タヌキの頭骨標本作り……2時間
- (3) ビデオ「雑木林はタヌキの楽園だった」……………1時間
- (4) 野性動物と人の生活とのかかわりについて（二回目、まとめ）……1時間（本時）

7 本時の指導

- (1) 本時の目標
 - ① 頭骨や資料を活用し、タヌキの特徴や生活の方法を理解する。
 - ② タヌキを手がかりにして、野性動物と人の生活とのかかわりについて自分の考えをまとめ発表する。
 - ③ 仲間の意見や考えをきちんと聞き、大切にすることを養う。
- (2) 本時の展開 *本時の目標②は、考えを深めるために小単元の導入時に一時取り組み学習を経た後、本時のまとめで再び各自の課題とした。

	学 習 活 動 と 内 容	教 師 の 支 援	資 料 ・ そ の 他
導 入 6 分	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習目標を明確にする。 ・以前にまとめた仲間の考え（動物と人の生活について）を数名が読む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・特に本時の目標②の完成を目指すよう促す。 ・プリントを数枚選び、他の人の文章を読ませる。 	タヌキの剥製 プリント
展 開 30 分	<ul style="list-style-type: none"> ・タヌキ、ウシ、イヌ、ネコの頭骨を観察し、わかる事を確認する。 ・タヌキの生活方法を理解する。 ・資料からタヌキの習性を読み取り、昔の地域の自然環境を想像する。 ・タヌキの生活場所を理解する。 ・動物と人の各々の立場から自然を考え、目標②へのステップとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒を集め観察のポイントを指摘する。 ・ビデオからわかった事を質問する。 ・目的に沿った内容のものを指示し、発表させる。 ・タヌキの生活場所を簡単に図示する。 ・ヒントになる言葉を板書し、具体的に考えさせる。 	頭骨標本4種 プリント 夏休みの宿題 プリント プリント
ま と め 14 分	<ul style="list-style-type: none"> ・目標②について自分の考えをまとめ発表する。 ・いろいろな考え方を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今までの学習を手がかりに考えさせ、発表させる。 ・仲間の考え方を尊重させる。 	プリント

(3) 評価

- ① 頭骨標本の観察から科学的に何がわかるか確認できたか。(技能・科学的思考)
- ② 資料からタヌキの習性を知ることができたか。(知識・理解)
- ③ 目標②について考え、自分の意見をまとめ発表できたか。(表現・科学的思考)
- ④ 仲間の発表をきちんと聞き、大切にできる態度が養えたか。(関心・意欲・態度)

(4) 授業の考察

- ① 表現の方法や表現に至る過程を重視し、一人一人の意見を大切にしながら学習を進めれば、消極的な生徒の表現活動も十分期待できる。
- ② 体験的な学習により大部分の生徒の考えが深まったが、そうでない者もいたので（動物がかわいそう）地域の特色の一つである林業の関係者の話も取り上げれば良かった。
- ③ 多くの仲間の多様な考えを知り、視野を広めた生徒が多かった。
- ④ 頭骨標本には、普段授業に消極的な生徒も大きな関心を示した。

8 今後の課題

- (1) 体験的な学習は、準備・まとめ等に時間がかかるため、計画的かつ弾力的に時間を設定する必要がある。
- (2) 表現活動は、年間を通しての意識付けや指導が必要である。
- (3) 身近な自然を観察する力の向上を目指し、今後も地域素材を活用していきたい。

実践事例・その6

身近な素材を活用した体験学習を通して、表現力を伸ばす指導法の工夫

中学校 第2学年 家庭科

1 領域名 「食物」

題材名 「りんご・食品の褐変について」

2 題材の目標

- (1) りんごの褐変がなぜ起きるのかについて興味を持って仮説を立て、実験・観察することができるようにする。
- (2) 観察したことについて、班ごとに創意・工夫して発表することができるようにする。
- (3) これからの授業や生活に学んだことを生かそうとする態度を養う。

3 題材設定の理由

生徒は日常生活や学習の中で、事象を知識として教えこまれていたり、当たり前のこととして聞かされていたりすることが多い。常に受け身になり何となく「ああそうなのか」と流してしまっていることが多いのではないだろうか。その中の一つの事象にでも「どうしてだろう、なぜだろう」という興味・関心を持たせることは貴重なことだと思う。そして、自分でやってみること（体験）が本当の意味での学習になるのではないかと考える。さらには、自分の目で確認したことを伝えることが、自信を持った発言につながるのではないかと考え、体験及び表現の観点から本題材を設定した。

4 研究主題との関連

日常生活の中で、包丁を使ったり、りんごの皮をむいたりという体験をしている生徒が少なくなっている。りんごの皮をむくという体験をした上で、りんごの褐変について観察学習をする。

りんごの色が変わるのを防ぐために、一般的には塩水につけると効果的であると言われているが、それはなぜかという課題を解決するために、いくつかの具体的な方法で変化を観察する。その中から答えを見つけ出す。また、観察を通してその変っていく様子を自分の目で確認し、結果を他人にわかりやすく伝えるための方法を班ごとに創意・工夫し発表させる。

以上、2つの観点からの学習により生徒の表現力が養われるものと考えた。

5 地域の様子と生徒の実態

本校は西部山間に位置し、山を隔て山梨県に接する。全校生徒111名、4学級という小さな学校である。学校を中心にV字型に南北に広がっている学区であり、遠い生徒は、20

kmもの道のりをバスなどで通学している。ほとんどの生徒がバスや自転車を利用し、通学に時間がかかっている。バスの時間に制約があり、放課後の活動に支障があるなど厳しい状況にある。生徒は素直で、言われたことに対して真面目に取り組むが、意欲的・積極的に対応する部分では、まだ不十分である。家庭科の各領域は、自分の生活経験から発言できるということが多いため、他の教科では思うように発言できない生徒が、認められるという場面も多く見られる。小・中学校と同一集団のため固定された人間関係や刺激が少ないなどの状況下で、これからをたくましく生き抜く力として表現力は、不可欠のものであると考えている。

6 指導計画 「食物」 35時間

(1) 青少年の栄養と献立…… 8 時間 ① 私たちと食物 ② 健康と栄養 ③ 食品の栄養的特質 ④ 食品群別摂取量のめやすと献立	(2) 日常食の調理……24時間 ① 食品の性質と選択 ② 実習の計画・準備 (本時1 / 3時) ③ 調理実習 (3) 生活と食事……… 3 時間 ① 食事の役割 ② よりよい食生活を求めて
-------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

7 本時の指導

(1) 本時の目標

- ① りんごの褐変がなぜ起きるのかを考え、興味を持って課題を解決するための実験・観察ができる。
- ② 食品の変色について理解し、それを防ぐ方法について知る。
- ③ 観察したことをグループで協力し、発表できるようにする。
- ④ 学習したことを、これからの授業や生活に活用しようとする態度を養う。

(2) 本時の展開

	学 習 活 動 と 内 容	教 師 の 支 援	資 料 ・ そ の 他
導 入 5 分	・一時間前にむいて、4種の方法で放置したりんごを観察することを確認する。		
観 察	・観察をし、褐変の様子をプリントにまとめる。 ・発表の具体的方法を考える。 ・発表をする	・切る、試食など具体的な観察方法を助言する。 ・長時間放置したりんごを見せ比較させる。	・放置りんご ・学習プリント ・半日放置したりんご

・ 発 表 30 分	・他の班の観察の様子を聞き、違う方法などを、聞き取りメモをする。 ・なぜ褐変が起きるのか、またどうしたら防げるのかを話し合う。 ・発表する。	・他の班の発表からの聞き取り学習をさせる。 ・他の野菜の変色を見せる。 ・机間巡視をする。	・じゃがいも ・ごぼう
ま と め 15 分	・空気に触れると褐変が起ることに気付き、工夫で防げることを理解する。 ・プリントにまとめる。 ・後片付けをする。	・工夫には様々な方法が考えられること補う。	

(3) 評価

- ① りんごや食品の変色理由について確認すると共に、防ぐ方法を知ることができたか。
(知識・理解)(創意・工夫)
- ② 観察したことを伝える方法を創意・工夫して発表できたか。(創意・工夫)
- ③ 学習したことを実習や生活に生かそうとする考えが持てたか。(生活の技能)
- ④ 課題を持って、解決するための学習ができたか。(関心・意欲・態度)

(4) 授業の考察

- ① 放置の方法を工夫したり、いろいろな角度からの観察ができた。
- ② 一斉授業の中では、目立たず、消極的な生徒も意欲的に取組み、仲間から認められる場面が多く見られた。
- ③ 観察の中で体験(切る・触れる・食べる)を通し、自分の感じたことなどを率直にまとめることができた。
- ④ 自分の生活やこれからの実習に置き換えた考え方や、資源保護などに発展させた意見を見いだすことができた。

8 今後の課題

- (1) 体験または観察を通して学習したことを、よりよい方法で伝えることを体得させたいと考える。
- (2) 実習を中心とした授業の中で、生徒の興味・関心が作業のみにとどまらぬよう配慮する必要がある。
- (3) 実生活に即した身近な教材を工夫し、生きた学習になるよう心掛けるようにする。

V 研究のまとめと今後の課題

本研究部会では、地域の特性、児童・生徒の実態等について共通理解を図った上で、へき地教育の課題を「豊かな表現力の育成」と捉らえた。そこで、研究主題に迫るために次の二つの仮説を設定した。

〈仮説1〉地域素材や身近な素材を活用し、体験的な学習活動を展開することにより、児童・生徒の興味・関心が増し表現しようとする意欲も高まるであろう。

〈仮説2〉多様な考えを生かしながら主体的な学習活動を工夫し、発表の機会や場を設定することにより、お互いの良さを認め合えるであろうし、よりよい表現を工夫するであろう。

上記の仮説に基づいて、検証授業を行った。その結果、次の成果を得ることができた。

1 研究の成果について

- ・調べる項目をはっきりさせ、主体的に調べたことにより、他の地域の社会事象についての理解を深め、結果や自分の考えを発表しようとする意欲が高まった。(事例1小5社会)
- ・身近な素材を継続的に調査することにより、自然環境に目が向けられる様になり、調べた結果を意欲的に発表しようとする態度が身に付いてきた。(事例2小6理科)
- ・異学年グループでの観察活動は身近な自然に目を向けることができた。全校児童の発表を取り上げることで、意欲的に発表しようとする態度が見られた。(事例3小道・特)
- ・生徒が主体的に調査したことを、適切な発表の機会や場を与えることにより、発表内容が深まり、効果的な表現の工夫が見られた。(事例4中1社会)
- ・地域素材を活用した体験的な学習により、身近な自然の変化や状態に気づき自分の意見や考えをまとめることができた。発表を通し視野を広めることができた。(事例5中2理科)
- ・身近な素材で体験的な学習を展開することにより、主体的に取り組み事象を直接感じる学習ができた。また、感じたことを自分の言葉で表現することができた。(事例6中2家庭)

研究の結果、事例を通してわかるように児童・生徒は「体験的な活動」「主体的な活動」を展開することにより、よりよい方法で表現しようとする意欲的な態度を養うことができた。

2 今後の課題について

- (1) 機会や場に合ったより適切な表現方法を工夫し選択できる力を身に付けさせる必要がある。
- (2) 身に付けた表現力を、日常の生活の中でさらに実践的に高めていく必要がある。
- (3) より豊かな表現力を高めるための評価の在り方を研究していく必要がある。
- (4) 表現力の育成は、教育活動全体のなかで意図的・計画的に指導することが大切である。